

学校法人相愛学園

理事長 相田 芳久 様

令和5年度

自己評価結果報告書

学校法人相愛学園 焼津幼稚園

園長 相田 早苗

理事長 決裁



令和5年度の園運営についての自己評価を実施いたしましたので、結果をご報告いたします。

主体的な子どもの姿を育てることを園内研修の根幹のテーマとし、今年度は2つの具体的テーマを設けて研修を進めてきました。昨年からの継続である子どもの遊びを充実させるための園庭環境については、期ごとの振り返りはできたものの計画立案とそれに沿った実践という点では十分でなかったという反省が残りました。次年度は、計画の立案についてもう少し具体的に進めたいと考えます。もうひとつの“体幹を育てる”というテーマについては、学年ごとに無理なく継続して取り組める遊びや経験を工夫し進めることができました。次年度は、今年取り組みを踏まえさらに充実していけるよう進めてまいります。

また、全クラス園内公開保育を行い、実際の保育の場面をもとに話し合い、意見を得たりしながら保育の質の向上に努めてまいりました。忙しく限られた時間の中、研修する時間を作っていくことが大変になってきていますが、短時間で効率よく進める工夫をしながら進めていきたいと思っております。

また、近年の子どもの発達の姿が変化してきて、教師側が目指す子どもの姿と実際の子どもの姿とのギャップが大きく、個別対応への比重が増え、難しさを感じている中、教育課程の見直しを進めてきていますが、これも次年度以降継続してまいります。

以下、園長による自己評価、教員の自己評価等について、自己評価結果の報告として提示致します。

具体的な教職員の自己点検・評価については、本年度はクラス担任に、研修テーマについての振り返り、子どもへの自身の関わりを振り返っての考察について、級外教職員は、自らの職務、自身の子どもへの関わりや援助、安全管理について、各自で振り返りを行ったものをまとめました。また、保護者アンケートについては2月の“ようちえん通信”（園長通信）において、子どもの成長や園の運営について自由記述のアンケートを実施しました。

令和6年2月26日

Ⅰ 「教育内容」についての検証結果及び改善策

近年の子どもの姿から体幹の育ちを支えようという園内研修のテーマを設けて取り組んだ。学年ごと、生活や遊びの中で継続して無理なく取り組める経験を計画し実践、振り返りをしながら進めた。少しずつ成果も見られ、次年度も引き続き取り組みたい。もうひとつは、昨年からの継続して、遊びを充実させるための園庭環境の工夫をテーマとして取り組んだが、主に学期ごとの振り返りに終わってしまったことは反省として残る。子どもが十分に遊びこむための時間的なゆとりの捻出、より主体的に遊びが広がるための教師の遊びへの関わり方も課題である。個別の対応を必要とする子が年々増えている現状の中、全体としての保育をスムーズに進めにくい様子も出てきていたり、全体の子どもの姿としてみても、子どもの姿の実態に合わせて保育のねらいを変えていく必要も感じたりと、課題

Ⅱ 「地域の幼児教育センターとしての役割」についての検証結果及び改善策

未就園の会については、近年、小規模や保育所に通う子が増えていることも有り、参加者が減っているが、それでも楽しみに参加し親子の触れ合いや関わりの一助になればと思う。在園児については、今年度も、個の気になる発達の様子や保護者の子育ての悩み等必要に応じて面談の機会を設けたり、巡回カウンセラーや焼津市巡回相談、地域の相談機関などつないでいけるよう努めた。家庭の事情や教育力も様々で、子の育ちについて共有したり子への関わりについて共通意識を持つのが難しいケースも多い。

Ⅲ 「安全管理」についての検証結果及び改善策

12月に焼津市くらし安全課から講師を招聘し、防犯の研修を実施し、対応について職員間で共有に努めた。また、能登半島大地震をうけ、3学期開始時には、環境の点検を行った。避難訓練では、地震・津波・火災等の対応の違いも伝えながら進めてきた。園内での子どものケガ防止のため、ヒヤリハットの確認を定期的実施するようにした。

Ⅳ 「人事管理」についての検証結果及び改善策

パートも含め勤務体制が様々なので、それぞれに配慮しながら進めてきた。各々家庭の事情等で外出や早退等もしやすいようにカバーし合って進めてきている。長期休暇中の預かり保育について、人材派遣等も活用しながら、職員の負担の軽減にも努めている。

Ⅴ 「財務管理」についての検証結果及び改善策

財務管理については、園児数も減少してきている現状を受けて、施設設備計画も吟味し、節約を心掛けたい。

「外部アンケート」からの検証結果及び改善策

年間の教育行事後に実施している保護者アンケートからは、園の教育や我が子の成長を理解し喜んで下さっている様子が窺えた。園での子どもの様子をもっと知りたいという意見もあり、手紙やHP以外の方法について模索したいと考える一方で、どんな情報を流すのが良いのか、個人情報保護の視点からどこまで挙げるのか、など難しいと感じる点もある。保護者の考え方やニーズも年々多様化、また個別化してきていて、対応の難しさも感じる。

<1> 研修テーマ（成果と課題・来年度への具体的手立て）について、自身の取り組みを振り返っての考察

- ・ 取り組みについては、自分がやりやすいものについては、継続しておこなうことができたものの、そうでないものについては、準備不足等で子ども達への指導が不十分になってしまった。
- ・ 体幹をそだてるための取り組みは、継続していくことが大切だと感じた。子ども達も、日々の遊びの中で自らやっていたり張り切って挑戦していたり、自信にもなったようだ。子どもから発生する遊びも大切だが、保育者が主導となって遊びをリードすることも大事だと感じた。次年度も引き続き取り組み、子どもの発達の様子に合わせ、段階をおって体験内容を考えるようにしたい。
- ・ クラスの様子として、個のあそびを好む様子が多く、保育者も一緒に遊びに加わりながら援助してきた。そこから子ども達なりに考えたり誘い合って楽しむ姿が増えてきたように思う。行事の前など慌ただしい中ではおざなりになってしまうこともあり反省するが、子ども達の様子に合わせて変化させていくことを意識して過ごした。
- ・ 園庭のあそびの様子では、いろいろな遊びに自分自身が目を向けていくことができなかった。次年度もよく遊びを観察し、遊びの様子に合わせて環境を設定していけるよう心がけたい。
- ・ 体幹を育てるために、一年間継続して簡単な遊びや運動を取り入れてきて、大きな目に見える成果はなくても、継続していくことで体の動かし方がスムーズになっていく子どもの様子を見て、次にどんな動きを取り入たらいいか書籍や動画などで調べながら進めていった。手探りで、生活が忙しくなると後回しにしてしまう時期があったことは反省として残る。次年度は、今年度の取り組みを基に年間を通しての見通しを持ち、実践をしながら再構成していきたい。
- ・ 満3歳では、遊びの発展というより、個の遊びから友達との遊びに繋げていくことを意識した。物の貸し借りでトラブルが多いが、保育者がその都度仲介に入り、援助した。なかよしの友達ができると砂場で一緒に遊んだりおうちごっこを楽しんでいる様子があった。保育者から離れられない子にも、他の子への関心が持ててつながっていけるよう配慮した。園庭のみでなく、ホールも活用して体を動かすあそびを多く経験したり、屋上まで階段を使って上ることも多く取り入れた。次年度も、継続して行いたい。
- ・ 課題に対して、今できることは何かを考えて、継続して取り組んでいけるよう進めてきた。実践してみて、個の特性や課題もあり難しさもあるが、体を動かして遊ぶことや運動遊びへの興味・関心を深めることは出来たと思う。リトミックでも集中する力が少し身についたように感じる。個の特性や課題も大きいですが、個にあったステップやテンポで取り組めるようにサポートしながら進めたい。
- ・ 体幹を育てるために、特別なことではなく日々の生活の中で出来ることから始め、取り組みやすかった。成果に繋がったことも、なかなかうまくいかないこともあったが、そこから生活や遊びが広がったり充実していくきっかけになったと思う。学年間で共有しながら進めていくようにしたこと、クラスの取り組みの差は出なかったと思う。主体的な遊びの充実については、保育者間の話し合いや計画、実践が不十分であったという反省が大きい。
- ・ 遊びについては、子ども達に具体的に知らせていくことや好奇心を掻き立て、わくわくするような環境設定の工夫、継続的な関わりを増やしていくことで、遊びの充実から主体性の育ちへともう少

し繋げられたのではないかと思う。子ども自身が試行錯誤できる環境を遊びに関わりながら作っていくことが大切だが、現状の保育の中でどの場面で子ども発信、主体の遊びを保障していくかを再考したい。

- ・ 体幹を育てる遊びは、継続した取り組みで成果が実感できてよかった。トレーニングにならないよう遊びの延長として生活に取り入れたり、家庭への発信にもつなげていけると良いと思う。

<2> 自分自身の、子どもへの関わり方を振り返っての考察

- ・ 子どもの意見を認めてあげてことを意識し、子どもの言葉や行動を否定から入るのではなく『そういう考えもあるね』『いいと思うよ』と認めることで、子どもも自分の気持ちを素直に伝えられるようになると思う。いけないことは、ストレートに“ダメ”というのではなく、気持ちを汲み取りつつも違っていることを具体的にわかりやすく伝えていくことが大切だと思う。
- ・ 一人ひとり個人差があり、課題も違うため、個にあった関わりを心がけている。個にあった対応をする中で、その子なりのがんばりを認め、次への意欲につながるようにした。“こうなってほしい”という教師側の思いが強くなりすぎてしまうと不適切な関わりになってしまうかもしれないので、言い方、伝え方には気をつけて過ごした。出来ることを認めプラスの声かけを意識していきたい。
- ・ 日々の言葉かけなど“大人に対してだとしたらこういう言い方するかな？”“言われたらどう感じるかな？”など考えながら言葉を選んで関わるようにしてきた。自分に余裕がないとそこへの意識も薄くなってしまうので、今後も気をつけていきたい。考えすぎてうまく援助できないこともあった。今後も子どもの意思や人権を大切にしながら関わっていきたい。
- ・ 子どもの好ましくない行動等に注意する際、こちらの一方的な指導にならないよう留意した。好ましくない行動を繰り返してしまう様子に、アプローチの方法を工夫しながら根気強く援助するよう努めた。
- ・ 子どもに寄り添い、まずは褒め、プラスの言葉がけをしようと心がけたが、理想通りにいかないこともあり反省する。個へのかかわりが必要なことも多く、そんな時は級外の先生に助けをもらうようにした。
- ・ いろいろな子どもの表れがあり、その都度状況も違い、常に冷静に対応しようと心がけているものの、迷うことが多い。注意したりするときは、その後のフォローを忘れないようにしたり、厳しい中でも愛情が伝わるような言葉がけやスキンシップをとるようにしてきた。過程とも連絡をとりあって、双方の思いを共有できるようにしていきたい。
- ・ 個人差もあり、すぐに結果を求めずゆったりと構えながら進めてきたつもりだが、なかなか自分を表現しようとしないう子へのコミュニケーションのとり方も難しく、なかなか改善につながらないこともあり戸惑いもあった。他の保育者の関わり方や伝え方を参考にしてみたりした。他の保育者の協力、支援を得ながら進めていくようにした。自分の対応については、適切かどうか自問するよう心がけてきた。
- ・ 子どもの好ましくない行動について、それを指摘したり“こうしたらいい”と教えたりすることを減らし、アドバイスやヒントになるよう意識してきた。子どもが安心してのびのびと自己主張できる存在になれていただろうかと反省する。協調性や自己抑制も大事で、年長児には意識して育てたい力だが、まずは自分の考えを持つ、自信を持って伝える力を高められるように関わっていきたい。

令和5年度 級外教職員 自己点検・評価まとめ

<1> 自らの職務についての考察

- ・ 不適切保育が目されるようになり、自分の言葉かけを振り返ることが多くなった。今の言葉かけは大丈夫か、援助は適切か、注意の仕方は？注意が伝わっているのか…など考えることがあった。不適切とは？ということについてもっと理解し援助していきたい。
- ・ 異年齢保育では、互いの育ち合いも多く見られる反面けんかもある。関わりの中で共に成長できるよう、生活の内容もさらに工夫していきたい。
- ・ 互いに仕事内容を共有し、フォローし合っていると感じられ、ありがたい。自分も積極的に取り組んでいきたい。
- ・ 年度当初は、級外として、まずは子ども達との信頼関係を築こうと努力し、わからない面については担任にも様子を伺い、対応を考えるようにしていった。
- ・ 正規職員でなくても、保育運営に関わる一員として責任ある行動を心掛けている。また、自分も大切であると考え、前向きに明るく仕事に向き合うよう努力している。自主的に研修を受けたり書籍や動画等で、自分なりに学べるよう努めている。
- ・ 朝の受け入れでは、温かく元気に迎え、視診が出来るようにしてきた。
- ・ 初任の保育者をサポートするにあたり、自分自身もあらためて“子どもの主体性を育てる”ことについて考えたり学んだりすることが多かった。保育者自身の主体性をのばすという意味でも、今後もサポートしていけたらと思う。
- ・ クラス担任へのサポートの程度が、級外保育者によって違いがあるようで、なるべく共通にした方がいいのではないかと感じるが、話し合ったり連絡を取り合う時間がとれない。月に1回でも話し合いが出来れば…と思う。
- ・ 自分の思いをうまく伝えられずに泣く子が増えているように感じる。じっくり話を聞いてあげられる対応を心がけていきたい。
- ・ 子どもとの信頼関係を築くことが出来るよう努力してきた。持ち味を活かせる魅力ある保育士になれるよう努力し、笑顔の輪を広げていきたい。
- ・ 自分の得意な絵本の読み聞かせや素話を、子ども達の生活や遊びに活かせる機会をもっているが、その運営の仕方についてももう少し考えたい。
- ・ 異年齢同士が関わり合って成長していく姿やクラスと葉違う子どもの様子が発見できることは有意義。子どもへの援助や支援については、保育者それぞれに思いがあると思うので、他の保育者と話し合いをしながら同じ方向性で進めていけるようにしていきたい。

<2> “子どもの主体性を育てる”という観点から、自身の子どもへの関わりや援助、支援についての考察

- ・ 子ども達が様々なことにチャレンジできるよう温かく見守り、時に励ますことを心がけている。
- ・ 考えて接してもうまくいかないこともあり、子どもだけでなく保護者への伝え方やフォローも難しいと感じる。級外としては関わりが細切れになってしまうため、先を見越した関わりをしていかなければ

ばと思う。

- ・身の回りのことがままならない満3歳や年少児では、自分で取り組めるよう見守り、できたところをたくさん認めていくようにしたが、生活の時間もあまり手伝ってしまうこともあった。時間を意識していくと難しいところもあるが、根気強く見守る姿勢を大切にしていきたい。できなかったことが出来た時は思い切り褒めて、自信につながるようにしてきたが、今後は担任ともその場面を共有し、小さな成長も見逃さないようにしたい。
- ・“～して”というような指示語はなるべく減らすよう心がけた。個々の可能性を信じて見守る、今できなくてもいつかできるようになる、と信じ続けることで、その子のやる気の芽は摘み取られないと思う。
- ・保育室の環境として、時期やこどもの様子から構成されていくいろいろな遊びのコーナーがあるといいな、と感じる。級外という立場でも、可能な範囲で実現できることを考えたい。子どもの様子はいろいろと変化していくと思うが、それに対応しながら、子どものお気に入りの遊びがたくさん生まれたい。
- ・主体性を育てるには、子ども一人一人の個性をしっかりと理解することが大切だと感じる。個の理解についてさらに努力したい。
- ・子どもの目線に合わせ、気持ちを尊重し、ペースに合わせて声をかけ、友に遊び、笑い、好ましくない行動が見られたときは、何故いけないのか、どうしたらいいのかを一緒に考えるよう今後も温かく見守っていきたい。
- ・進んであいさつが言えるよう見守ってきた。鉄棒や雲梯などでの遊びを見守り、サポートしながら励まし、より意欲を持ってできるよう援助をこころがけた。
- ・自分の好きな遊びにじっくり取り組めるように、預かり保育の生活の流れの工夫も良いかもしれない。子どもの姿を見ながら、子どもが自分なりに考えたり工夫したり出来るように言葉がけや遊びの提案をし、意欲的に取り組めるよう心がけたい。

< 3 > 危機管理、安全管理の観点において、園生活や自身の園児へのかかわりについての考察

- ・ケガをした時に、どんな状況でケガをしたのかうまく説明できないこともあるので、子どもの遊びの様子を注意してみるよう努めている。
- ・大きなけがや事故にならないよう安全な環境を整え、未然に防ぐこと、発生時の対応、その後の再発防止などマニュアルをしっかりと定期的に確認、理解するよう心がけたい。
- ・保護者の方々のお顔をしっかりと理解しておくことも大切なことだと思う。今後も注意深く園への出入りの人物について見守りたいと思う。
- ・危機管理、安全管理の研修や再確認が全体で出来たことは良かった。
- ・午後の預かり保育中は、時間的にもケガが起きやすいと思うので、その時間の時は、特に危険が心配されるところの確認をしている。
- ・毎月の“ヒヤリハット”の共有は有効である。
- ・園庭で少しでも危ないと感じたところについては、自分自身で対応できることについてはすぐに行動できるようにしたい。

- ・ 子どもに危険を理解させることが出来るような工夫をしていきたい。
- ・ 室内遊びでは、異年齢ということで、遊び道具やハサミなどの用具の扱い方に違いもあるので、目を配りながら扱えるようにしている。戸外遊びでは、遊びに関わりながら危険な姿がないか注意していきたい。保護者が迎えに来る時間が様々で、その対応に保育者が抜けるため、互いにカバーできるように対応したい。